はじめに　研究の目的と方法

本研究の目的は巨大な高密度都市東京の日々の激しい流動を交通面で中心的に支えている東京特別区内・環状鉄道・山手線の実態を混み合い ── 密度や動度（モビリティ）の面から明らかにすることである。

この目的に接近する方法として、次の大中小の三つのスケールを設定する。

スケールⅠ･･･東京という都市規模から鳥瞰図的に見た山手線

スケールⅡ･･･一編成単位（１０両）で見た山手線

スケールⅢ･･･一車両の中（一つの箱）で見た山手線

スケールⅠでは戦後の山手線の発展や利用のされ方等をその利用者の推移から読み取り、山手線を通してそれぞれの駅とその街の変化をみる。また、時間帯（朝夕のラッシュ時、閑散時）別の山手線の運行の仕方を記録する。

スケールⅡでは実際に調査員が山手線に乗車し、混み合いの調査を行なう。合わせて山手線各駅の駅長に対してヒヤリング調査を行ない、人々の実際の利用状況、山手線29駅の現状をも把握する。

スケールⅢでは車両単位で人々の混み合い現象を観察する。混み合いの程度にしたがって人口の行動や心理にどのような変化がみられるかを、実態観察やアンケート調査を通じて把握する。

本研究は山手線を混み合いの面から明らかにすることであるが、逆に山手線という特異な交通空間に見られる高密、過密現象には、高密化していく現代都市の究極の姿をも読み取ることが出来ると考えられるし、ここには人と人との接触や間合いに関する原則を探ろうとする文化人類学的テーマも含まれていると予感される。

これらを踏まえて、高密度な人間居住の場である都市の将来について、一定の示唆を得ることが出来ればと考えている。